CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Kwansei Gakuin University Repository

2011年
11月25日
金曜日

# 図書館の時間

森田由利子　准教授（イギリス文学、ライフ・ライディング）

書籍の電子化への動きは図書館の有り様をも変化させている。例えば、イギリスの大英図書館は2006年に「国立電子図書館」という画期的なプロジェクトを立ち上げ、書庫にある著作権切れの書物、約10万冊の電子化に取りかかっているという。また、大英図書館のウェブサイトにログインすれば、『不思議の国のアリス』の手書き原稿やモーツァルトの音楽日記といった貴重書のページをクリック一つでめくることもできるようになっている。むろん、いずれの図書館においても、所蔵されている書物全ての電子化は不可能だろう。作業は気の遠くなるような時間を有するであろうし、著作権の問題もある。しかし、今後、技術の進歩で加速度的に書籍や資料の電子化が進めば、図書館に足を運ばずとも多くの情報が得られるようになるのである。では、図書館という豊かな空間は不要になっていくのであろうか。

図書館の起源は古代まで遡る。書物の記録媒体は粘土板、パピルス紙、羊皮紙、紙と変遷を遂げてはきたが、人間は本を収集することに力を注ぎ、図書館は多くの人に愛されてきた。図書館での時間を愛した無数の人物の一人として、英国小説家ヴァージニア・ウルフ（1882―1941）を取り上げたい。ウルフは20世紀初頭に難解な実験小説を書き残した作家であるが、彼女のエッセイの中には魅力的で読みやすいものも多いのである。例えば、海辺の古びた図書館で過ごす時間が描かれた一文がある。広々とした部屋は、窓が海に面していて風通しが良く、通りで魚を売る男の声も聞こえてくる。図書館が開設されて以来何十年、その部屋で声高に話す者は誰もおらず、まるで眠ったような空間である。部屋の真ん中にはその地方の花々の標本が飾られているが、花までも眠っているかのように頭を垂れている。そして壁際の書棚には忘れ去られた人々の伝記が並ぶ。背表紙が剥がれ落ち、その書名も読めなくなってしまっており、「まるであまりに眠いので互いに支えあっていないとまっすぐ立っていられないかのようだ」とウルフは描く。イングランド南西部、コーンウォールの美しい海辺の鄙びた図書館の情景が目に浮かぶ。情報を得るだけの場ではない空間の心地よさが感じられる。

ウルフは本をこよなく愛した作家だと評されるが、彼女にとって読書は本の中に書かれた文字を読むことだけではなかった。古い本の重さや手触り、匂い、色あせたページの色は彼女の想像力を刺激する。本の中には作者や描かれた人物が未だに息づいていると感じ、時には、本を読まずにその上に手を置いてそういった感触を楽しんだりしているのである。それ故、図書館で時間を過ごすことそれ自体が、ウルフにとっては大切な読書の一部であったと言ってよい。

図書館の有り様や役割は今後ますます変わっていくだろう。しかし、ウルフのように「本の中に人を感じる」ことはできずとも、多くの本に囲まれて過ごすことができる図書館は特別の空間である。関学上ヶ原キャンパス図書館の紙媒体の蔵書数は約120万冊。学生の皆さんには、是非本と共に豊かな図書館の時間を過ごしてもらいたいと思う。■